

大阪梅田「グラングリーン大阪」と東京渋谷「グレーター渋谷」の大規模まちづくり

本年2024年9月6日、「大阪最後の一等地」といわれるJR大阪駅北側（旧梅田貨物駅跡地の9.1ha）の大型開発プロジェクト「グラングリーン大阪」（うめきた2期）で、北街区の複合ビルと公園エリアの一部が先行開業する。

「グラングリーン」の名の通り、北街区と南街区の間に、4.5haもの都市公園を配置、整備する思い切った計画で、2013年に開業した「グランフロント大阪」（うめきた1期）に続き、本開発を主導する三菱地所は、「東京のようなオフィスビルを中心とした街区でなく、ターミナル駅に直結した“世界最大規模の緑の公園”を中心とし、都市格の向上を図る」という。（公園施設の設計は、日建設計、安藤忠雄建築研究所。大屋根は、金沢21世紀美術館等で知られるSANAA）

来年の大阪・関西万博への機運を高めるねらいで、2800万人とも予想される国内外からの万博来訪客を見込み、観光だけでなく、ビジネスエリアとしての大阪の魅力を発信すべく、9月、北街区に「JAM BASE」（産官学のイノベーション拠点）、複合ビル上層階にホテル「キャノピー by ヒルトン大阪梅田」がオープン、翌2025年春には、南街区のオフィス、ホテル等が開業予定である。（全体の完成は、2027年度）

ところで、本年3月のひと月間、日本経済新聞の伝統ある「私の履歴書」欄は、東急株会長の野本弘文氏。あの渋沢栄一、小林一三、五島慶太（競合企業を次々と買収し、その辣腕ぶりは「強盗慶太」と呼ばれた）に連なる大「東急」のリーダーとは、どんな方か…と思ったが、もちろん、立派な秀れた方なのだが、恵まれたエリートコースで今に至ったのではない（連載初回のサブタイトルは、「本流の外を歩む どこにいても腐らずに」である！）。実にドラマチックで、普段、この欄等見ない私でも大変興味深く、少し紹介させていただきたい。

野本氏は酒や果物を扱う商家の次男として福岡県行橋市に生まれた。遊びやいたずら好きで、授業をさぼっては仲間と外に遊びに行き、「校長室で正座させられた回数は学校一」というわんぱくな少年、地元の高校では、応援団長を買って出たり、文化祭でコントのシナリオを書いたり、当時の人気ドラマをパロディ化したりと大活躍。「みんなと何かをつくること、人を喜ばせること自体が楽しい」という、後年の東急でのまちづくりにつながるものであろう。

1971年に早大土木工学科を卒業、「東急がやっている多摩田園都市の開発が、これからすごいらしいよ」と人から聞き、技術系の社員として入社、式では代表として辞令を受けた。しかし、入社半年後、配属されたのは、東急線ではなく小田急線の厚木市で、住宅団地を開発する新設の小さな事務所だった。寮から片道2時間の通勤、ここで何と14年という長期勤務。その後、本社勤務となり、実績もあげたが、次は、当時、片道切符が一般的な関連会社への出向。3年後、43歳で本社へ戻るも、本来の不動産開発とは全く異質のケーブルテレビや衛星放送の「ニューメディア課」、新たにできた数人の小さな部署の課長で、WOWOW再建等に取り組む。

56歳で赤字の続くケーブルテレビ子会社の社長に。転籍制度の対象で退職金も渡され、これが最後の異動かと、覚悟したという。事業撤退も検討される中、社員と一丸となり、3年で累損を一掃。そして、60歳を目前にした2007年、「異例の人事」として、野本氏は東京急行電鉄の株主総会で取締役を選任され復帰、開発事業本部長に就任した。構造改革にも着手、バブル崩壊後に長らく足踏みを続けていた東急の反転攻勢を推し進めた。入社以来、専門外の部署、予想外の人事異動でも、ずっとまちづくりへの思い、志を温め、構想を認めてきた。不動産事業に、これまで携わったメディア・IT等も掛けあわせ、イノベーションを図った。

2011年、野本氏は社長に昇格した。銀座や新宿、丸の内等と比べ、渋谷の街としての存在感が薄れているのではないかと、その魅力とは…？ 選んだ開発テーマは「エンタテインメントシティ 渋谷」。回遊性とわくわくする仕掛けづくりを自らアイデアを出し、陣頭指揮した。2018年、取締役会長就任、現在に至る。

今、渋谷の中心で、「100年に一度」という大規模なまちづくり、再開発（“Greater SHIBUYA 2.0”）が行われている。かなり昔、学生時代の数年間を、渋谷―横浜間を30分で結ぶ便利さと、銀色に輝く車体に赤いラインがスマートなオールステンレス製車両に惹かれ、東急東横線沿線に住んだ私には、遠く離れた今も懐かしい場所である。

当時、渋谷駅東口の前にあった生活文化と娯楽の殿堂「東急文化会館」（プラネタリウムや大きな映画館も）は、2003年に閉館。2012年、高さ182.5m、地上34階、地下4階、国内最大級の劇場「シアターオーブ」も入った情報発信拠点、「渋谷ヒカリエ」に変身した。ここには、災害発生時に帰宅困難者を収容するスペースとして、5,500㎡が確保され、高度な耐震性能をもつ。

また、渋谷駅西口にあった「東急プラザ」も2015年閉館。2019年、都市型観光の拠点として、西口のランドマークを担う複合施設、「渋谷フクラス」（幸福をふくらます、とのコンセプト）となり、1階は空港リムジンバス等のバスターミナルや観光支援施設、17階には、街を一望できる屋上テラス「SHIBU NIWA」、他階には、商業施設として、前身の名を引き継ぎ「東急プラザ渋谷」等が入っている。

渋谷駅を囲み、他に「渋谷ストリーム」（旧駅舎・高さ180m・地上34階・2018年）、「渋谷リバー 스트リート」（渋谷川沿いの遊歩道）、「渋谷スクランブルスクエア」（渋谷駅の真上・地上47階・地下7階・東棟は2019年・他は2027年度の予定）の高さ229mの展望台「渋谷SKY」では、NHKの紅白歌合戦の中継や多くのCMのロケ地にも使われた。更に、「渋谷キャスト」（2017）、「渋谷ブリッジ」（2018）、「渋谷ソラスタ」（2019）、「渋谷アクシュ」（ヒカリエ隣接・2024年度）等、林立している。

前述の野本弘文・東急会長は、今年4月1日の東急グループ50社の合同入社式で、1200人の新入社員らを前に、「創業者の五島慶太翁は、『自分が現在携わっている仕事については、常に第一人者となるよう努力することが大切』という言葉を残されたが、…つまらないと思う仕事も工夫次第では面白くも、価値ある仕事にもなります。…夢や希望は、誰でも持つことはできるが、強い『志』を持って行動していかなければ、決して『夢の実現』はない、…皆さんのいくつかの『夢の実現』が、世の中にとって必要とされるものであることを願っています」と語った。傍流にいても志を捨てず、前向きに立ち向かった、まさに自らの体験からの言葉であろう。

（谷 奈々）

21世紀 WAKAYAMA

Wakayama Institute for Social and Economic Development

Vol.107

発行 2024年8月9日
編集発行者 一般財団法人 和歌山社会経済研究所
〒640-8033 和歌山市本町2丁目1番地
フォルテワジマ 6階
TEL(073)432-1444(代)
FAX(073)424-5350
URL : <http://www.wsk.or.jp/>
印刷 株式会社 さかぐち昇和印刷

無断転載・複写を禁ずる